

株式会社さくら都市総合研究所

主席 清水 秀幸  
研究員17 都市の景観を  
考える

国も、昨年末に「無電柱推進法」を施行し、2020年に開催される東京五輪・パラリンピックを契機に、無電柱化の気運を高め、「電柱大国・日本」の汚名返上に本腰を入れ始めた。大学教授ら有識者で構成する「無電柱化推進のあり方検討委員会」も既に6回開催されている。

そして、その施行により無電柱化事業を推進しようとする都道府県・市区は430を超え、全体の6割近くに達している。もちろん、その中には長野市も名を連ねている。

そして、本章の物質的景観要素の中で、特

筆しておきたいことは、樹木（街路樹）と水景についてである。

街路樹は、その都市、そのまちにおいて地域住民の愛着が深く、時によりシンボルであり、観光名所であり、総じてアイデンティティである場合が多い。

また一方では、少子高齢化による財政的な制約が強まる中、限られた予算で良好な都市環境や景観をどう維持していくか、という難題に頭を悩ます地方自治体も多いのが現実だ。

実際、街路樹が交通の妨げとなっている事例や、多額の維持管理費用の膨らみから、街路樹の見直しに着手す

る自治体も増加している。

例えば、大きくなり過ぎた街路樹をコンパクトな樹木に植え替えとか、成長が遅く、枝切りの必要な樹木への移行がその実例と言える。（続く）

清水 秀幸氏（しみず・ひでゆき）1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか6委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長



長野市内の街路樹